

Meteorological Expressions in Modern Icelandic

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/41413

現代アイスランド語の天候表現

入江 浩 司

0. はじめに*

本稿の目的は、現代アイスランド語¹の天候表現を概観し、言語類型論的立場からの考察を加えることである。類型論的立場からの先行研究として Eriksen et al. (2010) を参考にする。なお、本稿はアイスランド語の天候表現を網羅的に提示するものではなく、表現のタイプにどのような広がりがあるか、試験的に調査した結果を示すものである。

本稿の構成は次の通りである。第1節でアイスランド語に現れる天候表現の形態的手段について、主として降雨の表現を例にして概観する。第2節で、気象現象ごとにどのような表現手段の可能性があるかを検討する。次いで第3節で言語類型論的立場からの考察を行なう。第4節はまとめである。

1. 表現のタイプ

まず、どのような形態的手段があるか、気象の主要な意味を担う品詞に注目して例示を行なう。ここでは天候表現として頻出する降雨の表現で例文を示す（ただし形容詞については他の表現で補う）。以下、動詞による表現 (1.1)、形容詞による表現 (1.3)、名詞による表現 (1.4)、に分けて検討してゆく。途中、降雨の動詞のとり項について検討する (1.2)。最後に、虚辞代名詞の種類と後続要素の品詞の対応についてまとめておく (1.5)。

1.1 動詞による表現

ここで扱うのは、動詞を述語として、その述語部分が天候に関する主要な意味を担うものである。典型的な天候表現に使われる動詞は、いわゆる非人称構文をとり、常に3人称単数形で現れる。ここではその代表として *rigna* 「雨が降る」という動詞で例文を示す。平叙文では活用した動詞が文の二番目の位置を占めるのがアイスランド語の語順の原則であり、文頭に副詞的要素が現れない場合、虚辞の *það* (中性3人称単数代名詞) が文頭に生じる²。(1a) は文頭に副詞的要素が現れない場合の例で、(1b) は文頭に副詞的要素が現れた場合の例である。虚辞の *það* は文頭でしか生じることができず、文頭の位置を他の要素(接続詞を除く)が占める場合に *það* を用いると非文になる (Eriksen et al. 2010: 574)。

(1) a. Það rignir.

それ.N.SG.NOM 雨が降る.3SG.PRS

「雨が降る／雨が降っている。」

b. Í dag rignir (* það) í Reykjavík.

今日 雨が降る.3SG.PRS それ.N.SG.NOM 中で レイキャヴィーク.DAT

「今日はレイキャヴィークで雨が降る／雨が降っている。」

天候表現では、虚辞の það の代りに男性 3 人称単数代名詞 hann が用いられることがある (2) (Eriksen et al. 2010: 574)³。það とは異なり、この虚辞の hann は文頭以外の位置でも現れることができる (2b) (Einarsson 1945: 168, 森田 2002: 137)。なお、虚辞の hann を使った天候表現は古めかしく感じられるようであり、比較的若い世代の話者では聞いたことがないという人も多い。

(2) a. Hann rignir.

彼.SG.NOM 雨が降る.3SG.PRS

「雨が降る／雨が降っている。」

b. Í dag rignir hann í Reykjavík.

今日 雨が降る.3SG.PRS 彼.SG.NOM 中で レイキャヴィーク.DAT

「今日はレイキャヴィークで雨が降る／雨が降っている。」

アイスランド語で yes-no 疑問文を形成するとき、活用した動詞が文頭に置かれるが、この場合も虚辞の það は現れることができず (容認度がきわめて低い)、動詞単独で疑問文が形成されるのに対して (3a)、hann は動詞の後に現れることができる (3b)。

(3) a. Rignir (?? það) ? ((1a) に対応する疑問文)

雨が降る.3SG.PRS それ.N.SG.NOM

「雨が降りますか／雨が降っていますか。」

b. Rignir hann ? ((2a) に対応する疑問文)

雨が降る.3SG.PRS 彼.M.SG.NOM

「雨が降りますか／雨が降っていますか。」

1.2 降雨の動詞のとり項

降雨の動詞は、指示対象をもつ項の一つもとらないことを特徴とするが、比喩的表現では、いわゆる “theme” の意味役割をもつ与格項をとることができ、この点で同様の与格項をとる自動詞や他動詞との平行性がある。ここで、この点について簡単に検討しておく。

rigna 「雨が降る」という動詞を使って「血の雨が降る」「弾丸の雨が降る」など、比喩

的表現として、雨以外のものが降ることを表せる。この場合、降る物は与格名詞句で表現される (4)。この与格名詞句は文頭の位置を占めることもできる (4b)。このような比喩的表現をとることができる天候の動詞は、現時点で筆者が確認した限りでは *rigna* の他に *bruma* 「雷が鳴る」(2.1 で述べる) があるのみである。Eriksen et al. (2010: 594) は、一つの言語は天候表現に一貫して一つの述語タイプを用いることが多く、虚辞代名詞を用いて動詞述語による表現を基本とする言語に、(指示対象のある) 項をとる自動詞表現があるとしても、それはほとんど比喩的表現に限定されるということを述べており、この観察はアイスランド語にも該当する。

- (4) a. *Það rignir blóði.*
 それ.N.SG.NOM 雨が降る.3SG.PRS 血.SG.DAT
 「(戦争などで) 血の雨が降る。」

- b. *Blóði rignir.*
 血.SG.DAT 雨が降る.3SG.PRS (同上)

アイスランド語には斜格主語をとると見なされる自動詞が数多くあるが、そのうち、いわゆる “theme” の意味役割をもつ与格名詞句を主語とする自動詞構文が (4b) と並行的である (5)。

- (5) *Bát-num hvolfði í brimi-nu.*
 ボート.SG.DAT-DEF 転覆する.3SG.PST 中で 荒波.SG.DAT-DEF
 「ボートは荒波で転覆した。」 (Thráinsson 2007: 205)

また、*kasta* 「投げる」など、目的語の指示する物体が動作主の手元から離れていくような行為を表す他動詞の多くは、アイスランド語では与格目的語をとる。

- (6) *Jón kastar steini.*
 ヨウン.NOM 投げる.3SG.PRS 石.SG.DAT
 「ヨウン (男性名) が石を投げる。」

このタイプの与格目的語をとる動詞の類例として、次のようなものがある: *hella* 「(液体を) 注ぐ」, *sleppa* 「放つ」, *spýja* 「(唾などを) 吐く」, *fleygja* 「(ゴミなどを) 捨てる」, *dreifa* 「拡散する、配達する」, *sóa* 「蒔く」, *skjóta* 「(弾丸などを) 撃つ」, *steypa* 「ひっくり返す」など (cf. Kress: 218)。降雨の動詞と共に現れる与格名詞句は、こうした動詞の目的語の位置に現れる与格名詞句と意味的には近いように思われる。

Eriksen et al. (2010) によると、「雨が雨降る」のような言い方で、一般化した用法をもつ降雨の動詞述語に加えて語源を同じくする降雨の名詞項を必要とする言語 (トルコ語など) があるという。アイスランド語の降雨の表現では、(4) の与格名詞句の位置に同族名

詞を用いると、形容詞をつけてもつけなくても、容認可能性はかなり低い。

- (7) ?? Það rignir mikilli rigningu.
それ.N.SG.NOM 雨が降る.3SG.PRS 多くの.F.SG.DAT 雨.F.SG.DAT
「たくさんの雨が降る／降っている。」

1.3 形容詞による表現

次に形容詞が vera (be 動詞に相当) と結びついて述語を形成する天候表現を示す。ここでは hvass 「風が (非常に) 強い」という形容詞で例示を行なう。

- (8) a. Það er hvasst.
それ.N.SG.NOM be.3SG.PRS 風が強い.N.SG.NOM
「風が強い。」

b. Hann er hvass.
彼.M.SG.NOM be.3SG.PRS 風が強い.M.SG.NOM (同上)

例文 (8) が示すように、形容詞による表現でも、虚辞代名詞として中性 3 人称単数形 það と、男性 3 人称単数形 hann の両方が可能である。降雨の動詞表現と同じく、中性代名詞は文頭以外の位置で現れず、それに対して男性代名詞は省略不可能である。(8a) のように það が用いられる場合、形容詞は中性単数形で現れる。ただし、この中性代名詞は文法的な項としての地位を占めるものではないため、述語部分 (er hvasst) は代名詞と積極的に一致をしているのではないと解釈される。(8b) のように hann が用いられる場合、形容詞はこれと一致して男性単数主格形で現れる。なお、過去分詞由来の形容詞 skýjaður 「曇っている」(後述) は虚辞の hann を用いることができないようであり、形容詞の種類によって虚辞のとり方の可能性に差があると思われる。

1.4 名詞による表現

次に天候の中心的意味が名詞によって担われる表現を示す。

- (9) Það (/ *Hann) er rigning.
それ.N.SG.NOM / 彼.M.SG.NOM be.3SG.PRS 雨.F.SG.NOM
「雨だ／雨が降っている。」

(9) の “Það er …” は一般に、「～がある」という存在を表したり、「～だ」という提示に使われる構文であり、動詞 vera (be 動詞に相当) は後置される主格名詞句の数に一致する。この構文により天候の名詞を提示する表現では、虚辞の hann を用いることはできない。(9) に対応する疑問文は次のようになる。

- (10) a. Er (*pað) rigning?
 be.3SG.PRS それ.N.SG.NOM 雨.F.SG.NOM
 「雨ですか／雨が降っていますか。」

- b. Rigning? (同上)

動詞が文頭に置かれる疑問文では、虚辞代名詞 *pað* は現れることができない (10a)。名詞単独で疑問のイントネーションを付して疑問文を形成することも可能である (10b)。

1.5 虚辞の種類と後続要素の品詞

ここで天候表現に現れる虚辞代名詞の種類と後続要素の品詞の対応関係についてまとめておく。虚辞代名詞としては3人称中性単数形 *pað* と男性単数形 *hann* の二つの可能性がある。天候の非人称動詞を述語とする場合、両者が可能である。＜vera + 形容詞＞を述語とする場合には、形容詞の種類によって両者が可能であったり、*pað* のみが可能であったりする。＜vera + 名詞＞が後続する場合、*pað* のみが可能である。表1はこれをまとめたものである。なお、先にも述べたように、虚辞代名詞としての *hann* は若い世代の話し手には使われなくなる傾向にあり、表に示すのは、これを使うとした上での可能性である。また、文頭に副詞などの要素が現れる場合や疑問文では *pað* は消えるのに対し、*hann* の場合は動詞の直後に移動して保たれるということも先に述べた通りである。

表1 虚辞の種類と後続要素の品詞の対応

虚辞	後続要素の品詞			文頭以外での出現
	動詞	形容詞	名詞	
<i>pað</i> (N.3SG)	+	+	+	—
<i>hann</i> (M.3SG)	+	+, —	—	+

2. 気象現象ごとの表現手段の可能性

この節では気象現象ごとに、どのような品詞の語（語源的関連のあるもの）で表現がされる可能性があるかを検討してゆく。以下、動詞による表現と名詞による表現があるもの (2.1)、名詞による表現しかないもの (2.2)、動詞と形容詞による表現のあるもの (2.3)、名詞と形容詞による表現のあるもの (2.4)、動詞の人称構文と名詞による表現のあるもの (2.5)、に分けて検討する。

2.1 動詞による表現と名詞による表現のあるもの

【雨】動詞 *rigna* / 女性名詞 *rigning* (例文は (1)-(4), (9), (10) を参照)

【雪】動詞 *snjóa* / 男性名詞 *snjór*

(11) a. *Það / Hann* *snjóar.* [動詞]

それ.N.SG.NOM / 彼.M.SG.NOM 雪が降る.3SG.PRS

「雪が降る／雪が降っている。」

b. *Það* *er* *snjór.* [名詞]

それ.N.SG.NOM *be.*3SG.PRS 雪.M.SG.NOM

「雪だ／雪が積もっている。」

(11a) と (11b) には意味の違いがあり、(11a) は雪が降るという動的事態を表すのに対し、(11b) は雪がすでに積もった状態であることを表す。

【風】動詞 *blása* / 男性名詞 *blástur*

(12) a. *Það / Hann* *blæs.* [動詞]

それ.N.SG.NOM / 彼.M.SG.NOM 吹く.3SG.PRS

「風が吹く／風が吹いている。」

b. *Það* *er* *óttalegur blástur.* [名詞]

それ.N.SG.NOM *be.*3SG.PRS 恐しい 風.M.SG.NOM

「ひどい風だ／ひどい風が吹いている。」

風が吹くという表現で名詞 *blástur* を使う場合、なんらかの形容表現をつけるのが普通である (12b)。

【嵐】動詞 *storma* / 男性名詞 *stormur*

(13) a. *Það / Hann* *stormar.* [動詞]

それ.N.SG.NOM / 彼.M.SG.NOM 吹く.3SG.PRS

「嵐になる／嵐になっている。」

b. *Það* *er* *stormur.* [名詞]

それ.N.SG.NOM *be.*3SG.PRS 嵐.M.SG.NOM

「嵐だ／嵐になっている。」

調査協力者の Finnur Friðriksson 氏によると、動詞 *storma* を使うことはあまりなく、名詞による表現の方が一般的であるとのことである。

【雷】動詞 þruma / 女性名詞 þruma

(14) a. ?? Það / Hann þrumar. [動詞]

それ.N.SG.NOM / 彼.M.SG.NOM 雷が鳴る.3SG.PRS

「雷が鳴る／雷が鳴っている。」

b. Það eru þrumur og eldingar. [名詞]

それ.N.SG.NOM be.3PL.PRS 雷.F.PL.NOM と 稲光.F.PL.NOM

「雷鳴がとどろき稲光がしている。」

調査協力者によると (14a) の動詞 þruma は、天候表現としては実際に使われるのを聞いたことがないという。また、名詞 þruma は (14b) のように名詞 elding 「稲光」とセットになって、どちらも複数形で使われるのが普通であるとのことである。なお、アイスランドで雷や稲光が生じることはめったにない。興味深いことに、動詞 þruma は比喩的表現として与格項をとって使用することができ、こちらは普通に使われる表現である (cf. 1.2)。

(15) Það þrumar bolta·num.

それ.N.SG.NOM 雷が鳴る.3SG.PRS ボール.SG.DAT·DEF

「(サッカーなどで) ボールが轟いて飛んでゆく。」

次に列挙するのは、辞書には動詞が記載されているものの、現在のアイスランド語ではほとんど使われておらず、対応する名詞による表現が一般的なものである。動詞は括弧付けで提示する。名詞による表現はすべて “Það er ...” の構文をとる。

【にわか雪 (驟雪)】(動詞 élja) / 中性名詞 él

【霧雨】(動詞 súlda) / 女性名詞 súld

【風】(動詞 vinda) / 男性名詞 vindur

【雹】(動詞 hagla) / 中性名詞 hagl

2.2 名詞による表現しかないもの

次に列挙する天候現象は、名詞による表現しかなく、すべて “Það er ...” の構文をとる。

【みぞれ】女性名詞 slydda

【霧】女性名詞 þoka

2.3 動詞と形容詞による表現のあるもの

【強風】動詞 hvessa / 形容詞 hvass (形容詞の例文は (8) を参照)

(16) Það / Hann hvessir. [動詞]

それ.N.SG.NOM / 彼.M.SG.NOM 強風になる.3SG.PRS

「風が（徐々に）強くなっていく。」

形容詞の例では (8) に示したように、虚辞代名詞の það と hann の両者が可能である。動詞と形容詞では意味の違いがあり、動詞による表現では風が徐々に強まって行く変化を表すのに対し (16)、形容詞による表現は非常に風が強い状態を表す (8)。

2.4 名詞と形容詞による表現のあるもの

【雲】中性名詞 ský / 形容詞 skýjaður (過去分詞由来)

(17) a. Það eru ský. [名詞]

それ.N.SG.NOM be.3PL.PRS 雲.N.PL.NOM

「雲が出ている。」

b. Það er skýjað. [形容詞]

それ.N.SG.NOM be.3SG.PRS 雲に覆われた.N.SG.NOM

「曇りだ／曇っている。」

c. Himinn-inn er skýjaður. [形容詞・人称構文]

空.M.SG.NOM-DEF be.3SG.PRS 雲に覆われた.M.SG.NOM

「空は雲に覆われている。」

名詞による表現では、空にいくつか雲が出ている状態を表し (17a)、形容詞による表現では空全体が雲に覆われている状態を表す (17b)。なお、形容詞 skýjaður「雲で覆われた」は、動詞 skýja「雲で覆う」の過去分詞に由来する。動詞の能動形は Árnason (2010) の辞書に例文とともに記載されているが、調査協力者によると、動詞が能動形で使われるのを聞いたことがないという。(17c) が示すように、形容詞 skýjaður は人称構文をとることもできる。非人称表現で男性単数代名詞 hann を虚辞として使用することはないようである。

2.5 動詞の人称構文と名詞による表現のあるもの

降雨のような典型的な天候表現ではないが、自然現象を表す動詞表現において人称構文と非人称構文の両者をとることのできる「噴火」と、人称構文しかとることのできない「輝く」をここで取り上げておく。典型的な天候表現から周辺の天候表現（一般的な自動詞表現）へと移行する領域を示す例と思われる。

【噴火】動詞 gjósa / 中性名詞 gos

- (18) a. **Bárðarbunga** **gaus.** [動詞：人称構文]
 バ火山.F.SG.NOM 噴火する.3SG.PST
 「パウルザルブンガ火山が噴火した。」⁴
- b. **Það** (/ ?Hann) **gaus.** [動詞：非人称構文]
 それ.N.SG.NOM / 彼.M.SG.NOM 噴火する.3SG.PST
 「噴火した。」
- c. **Það** **var** **gos.** [名詞]
 それ.N.SG.NOM be.3SG.PST 噴火.N.SG.NOM
 「噴火があった。」

動詞 **gjósa** は指示対象のある主格名詞句を項とする人称構文をとるが、虚辞代名詞を使用して非人称構文にすることも可能である (18b)。ただし、調査協力者によると、男性単数代名詞 **hann** を虚辞として用いることは可能ではあろうけれども、聞いたことがないという。

【(太陽が) 輝く】動詞 **skína** / 中性名詞 (**sól**)**skin**

- (19) a. **Sól-in** **skín.** [動詞：人称構文]
 太陽.F.SG.NOM-DEF 輝く.3SG.PRS
 「太陽が輝いている。」
- b. * **Það / Hann** **skín.** [動詞：非人称構文]
 それ.N.SG.NOM / 彼.M.SG.NOM 輝く.3SG.PRS
 「(輝いている。)」
- c. **Það** **er** **sólskin.** [名詞]
 それ.N.SG.NOM be.3SG.PRS 太陽の輝き.N.SG.NOM
 「太陽が輝いている／陽が出ている。」

動詞 **skína** は人称構文のみが可能な動詞で、月や星、あるいは電燈などの人工的な光源でも主格主語として用いることができる。名詞を使う場合、**skin**「輝き」単独ではなく、**sólskin**「太陽の輝き」、**tunglskin**「月の輝き」といった複合語で使われることが多い。

表 2 は以上、第 2 節で述べた状況をまとめたものである。左端の欄は動詞／名詞の順に並べ、形容詞についてはそのように記した。括弧内の動詞は辞書に記載があるが、日常の言語で使われることがないと判断されるものである。そうした動詞と、該当する動詞が存在しない部分には、構文欄に斜線を記した。形容詞については調査が十分でないため、確実な例のある部分を除いて空欄とした。

表 2 気象現象ごとの表現手段の可能性

気象現象	動詞		名詞	形容詞
	非人称構文	人称構文		
雨 rigna/rigning	+	—	+	
雪 snjóa/snjór	+	—	+	
風 blása/blástur	+	—	+	
嵐 storma/stormur	+	—	+	
雷 (þruma)/þruma	? +	—	+	
にわか雪 (élja)/él	/	/	+	
霧雨 (súlða)/súld	/	/	+	
風 (vinda)/vindur	/	/	+	
雹 (hagla)/hagl	/	/	+	
みぞれ —/slydda	/	/	+	
霧 —/þoka	/	/	+	
強風 hvessa/hvass (形)	+	—	/	+
雲 (skýja)/ský/skýjaður (形)	/	/	+	+
噴火 gjósa/gos	+	+	+	
輝く skína/skin	—	+	+	

3. 類型論的観点からの考察

Eriksen et al. (2010) は世界の言語の天候表現を類型化する試みであり、そこでは降雨の表現が典型とされ、当該の言語がそれをどの程度、述語動詞を意味の主体にして表現できるかが分類の基準とされている。表 3 がその分類であり (ibid. 593)、逐語訳的な英語でそれぞれのタイプのイメージが示されている。

表 3 Eriksen et al. (2010) による降雨表現の類型

[1] 項主体のコード化 rain falls, snow falls	[2] 一般化した述語によるコード化 (it/place) rains, snow rains	[4] 述語主体のコード化 (it/place) rains, (it/place) snows
	[3] 項と述語によるコード化 rain rains, snow snows	

述語動詞が天候の主要な意味を担う [4] のタイプ (ロマンス語やゲルマン語など) と、

項が天候の主要な意味を担って語彙的内容の薄い述語と組み合わせられる [1] のタイプ (日本語の「雨が降る」ような類型) を両極とし、その中間的なものとして項と述語の両方が関与するタイプ [2, 3] の 3 つに大きく整理されている。中間的なタイプについては、異なる気象を表す項に対して共通して使える一般的な述語 (降雨の動詞) をもつ [2] のタイプ (フィンランド語など) と、項と述語の両方に等しく意味の比重がある [3] のタイプ (トルコ語など) に分類されている。

この分類のポイントは、[4] のようなタイプの言語でも名詞による天候表現が並行して存在するのが普通であり、それは類型的分類の指標にはなりえないため、気象専用の動詞述語がどの程度発達しているかを指標として類型化する、ということである。この観点からアイスランド語の天候表現を見ると、アイスランド語は右端の [4] の述語主体のタイプで、その中でも虚辞を使用する西ヨーロッパ地域に集中して見られるタイプに属する。また、Eriksen et al. (2010) の指摘の通り、名詞による天候表現も並行して備えている。ただし、第 2 節で示したように、日常言語で使用される動詞による天候表現は種類が少なく、名詞による天候表現の方が種類は豊富である。

4. おわりに

アイスランド語は類型論的に見ると、気象現象専用の動詞が発達したタイプとして位置づけられる。第 1 節で示したように、アイスランド語で特徴的なのは、非人称の動詞表現 (および形容詞述語による表現) に現れる虚辞代名詞に 2 種類のものがあり、それぞれの文法的振舞いが異なるということである。専用の動詞が発達しているとはいえ、第 2 節で示したように、動詞による表現は種類が限られ、名詞による表現の方が豊富である。現段階では特に形容詞述語による表現の調査が不十分であり、今後さらに包括的な調査・記述を進めることが必要である。また、動詞と形容詞については天候表現以外の人称・非人称構文とも関連する部分があり、その全体像を明らかにすることも今後の課題である。

<注>

- * 本研究は JSPS 科研費 25370468, 26580072 の助成を受けたものである。2014 年 9 月上旬にアイスランドで行なった現地調査において、アイスランド語母語話者としてアークレイリ大学 (Háskólinn á Akureyri) 教育学部のフィンヌル・フリズリクソン (Finnur Friðriksson) 氏に協力していただいた。本稿で用いるアイスランド語のデータとその容認可能性の判断は、特に断らない限り、同氏に負うものである。

- 1 アイスランド語はインド・ヨーロッパ語族ゲルマン語派の言語である。アイスランド共和

国の公用語で、母語話者数は約 30 万人。基本語順は SVO である。名詞類には形態論的な格として主格・対格・与格・属格の区別がある。名詞には接尾辞定冠詞のついた形と、つかない形がある。不定冠詞はない。本稿では便宜的に、接尾辞定冠詞の部分ハイフンで区切って表示する。動詞の単純時制として現在と過去の区別がある。

- 2 アイスランド語の種々の虚辞構文については、Thráinsson (2007) 第 6 章に詳しい。
- 3 Einarsson (1945: 168) はこの代名詞 *hann* について、時に「大気」(*hann Loftur*) を擬人化したものであるとか、世界を支配する「神」を暗示するものとして解釈されることがあるとしている。気象現象に「神」のような外的参加者を想定して言語化することについては Eriksen et al. (2010: 570) を参照。さらに、アイスランド語のこうした表現については森田 (2002: 136) を参照。本稿ではこの *hann* を、指示対象のない虚辞代名詞として考える。
- 4 2014 年 9 月上旬に筆者がアイスランド滞在中、バウルザルブンガ火山の噴火が始まった。

略号

3	3 人称 (3rd person)	NOM	主格 (nominative)
DAT	与格 (dative)	N	中性 (neuter)
DEF	定 (definite)	PL	複数 (plural)
F	女性 (feminine)	PRS	現在 (present)
GEN	属格 (genitive)	PST	過去 (past)
INF	不定詞 (infinitive)	PPTC	過去分詞 (past participle)
M	男性 (masculine)	SG	単数 (singular)

<参考文献>

- Árnason, Möður (ed.) (2010) *Íslensk orðabók*. Fifth edition. Reykjavík: Forlagið.
- Einarsson, Stefán (1945) *Icelandic: grammar, texts, glossary*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- Eriksen, Pål; Seppo Kittilä and Leena Kolehmainen (2010) The linguistics of weather: Cross-linguistic patterns of meteorological expressions. *Studies in Language* 34(3): 565-601.
- Kress, Bruno (1982) *Isländische Grammatik*. München: Max Hueber Verlag.
- 森田貞雄 (2002) 『アイスランド語文法』(第 3 版) 東京: 大学書林.
- Thráinsson, Höskuldur (2007) *The syntax of Icelandic*. Cambridge: Cambridge University Press.